

定説なき地 捉え直す

文人の 武蔵野

村上春樹 ①9

代主義に対抗する場所として、懐古的で実感的で恣意的ともいえる武蔵野を拡張して提示しました。

一方、戦後の「文学散歩」を広めた文人である野田宇太郎や大河内昭爾が対象とした武蔵野は、ゆかりの場所を巡り、戦前の記憶と物語を想起し、幻視し、共通の財産とする実践的な場所でした。

1970年代後半以降には、文学地理の認識の枠組みを理論的かつ創造的に捉え直した批評家の柄谷行人や加藤典洋の国木田独歩「武蔵野」論が登場します。それらは、発想法がポストモダンでした



①国木田独歩の武蔵野を読み解いた柄谷行人②村上春樹の著作もある加藤典洋



が、武蔵野をよく知らない人たちにもわかりやすく、図式的であるという点で、むしろ古典回帰とも言えました。

「武蔵野」の語源や範囲には定説がなく、言語学者も地

理学者も実証的に確定できずにいます。地理的な範囲が定まらず、主観的で個人的な思い込みや思い入れ、融通無碍な心象地理が許されるのが「武蔵野」の特徴だと言えます。

しかし、「武蔵野」という曖昧な地名には1000年以上の歴史があります。曖昧さに甘えてばかりもられないと考え、「文人の武蔵野」の連載を始めました。武蔵野を語ろうとする人はとても多いのですが、残念ながら、万葉集の時代から現代に至るまでのテキストを対象にした通時的な武蔵野論を見かけることはありません。

また、1世紀以上にわたって使用され名指されてきた「武蔵野」が何を指すのか、

テキスト内ではどのような意味で使われてきたのかについて本格的に考えられたことは、ほとんどないようです。

そうした中、高木彬「『フルウェイの森』と『武蔵野』」(『武蔵野文学館紀要』2015年3月)は、作中の武蔵野を追求している稀有な村上春樹論です。春樹ブームを巻き起こした大ベストセラーから「武蔵野」を見ていきます。(敬称略)

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

*

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。



ドから。

これまで述べてきたように、万葉集が発見した風景としての武蔵野は、和歌や物語の系譜のなかで受け継がれ、ステレオタイプの風景と心情を継承する定番の場所(歌枕)となりました。

儒学者の佐藤一斎や俳人の正岡子規は、それぞれの武蔵野を旅で訪れ風景を発見し、描写の表現を獲得しました。

それらの伝統を引き継いだ国木田独歩や柳田国男は、近